

未来にのびる夢ロード^{ゆめ}



たけしの小学校のすぐそばに川があり、その土手にはアジサイが植えられている。町みんなは、そこを「アジサイ夢ロード」とよんでいる。六月には、色とりどりのアジサイの花が咲きほこる町の自慢の場所だ。

六月のある日、たけしは、友達と遊ぶのに、「アジサイ夢ロード」にかかる橋の所で待ち合わせをした。早く来たあきらとジュースを飲みながら友達を待っている、あきらが言った。

「来週の日曜日は、アジサイ祭りやなあ。祭りは楽しみなんやけど、その前にするクリーン活動がいややなあ。」

「うん・・・そうやな。」
たけしも、思わずそう答えた。（とにかく暑いし、草がすごいし、手がかゆくなる。みんなもいやなはずや。）

二人は、しばらく橋のところまで待っていたが、友達がなかなか来ないので空き缶をばいと捨ててむかえに行った。

六月の第三日曜日、アジサイ祭りの日がやってきた。たけしたちの小学校は、一年生から六年生までが、たて割りで分かれて、なかよし班を作っている。アジサイ祭りの前に、なかよし班ごとに場所を決めて、家の人も混じって、みんなでクリーン活動をするのだ。たけしは、班長を任されているので、

「ぼくたちの班は、この場所のクリーン活動をします。みんなはアジサイの株の周りの草をぬいで、一・二年生は、ゴミを拾ってください。」

と言うと、みんなでいっせいに活動にとりかかった。とにかく、すごい草だ。少し引っぱたく

らいではぬけないほど、草がしげっている。みんな一生懸命草をぬいたりゴミを拾ったりしているが、たけしは、

「こんな草いくらぬいたってきりがなし…。」
とブツブツ言いながら、あまりやる気がおこらずただ手を動かしているという感じだった。

すると、低学年の子らが、アジサイの根元の草のところから空き缶などのゴミをたくさん拾い見せにきた。たけしは、自分が捨てたのと同じ缶を拾ってきているのを見てドキッとした。

そこへあまり見かけないお姉さんがやってきて、

「この草すごいねえ。手伝うよ。いっしょにぬいてしまおう。」

と、声をかけてきた。そのお姉さんは、草ぬきをしながら、いろいろな話をしてくれた。話を聞いてみると、たけしの小学校の卒業生で、今は都会に住んでいるけれど、たまたま今週は帰ってきているのだという。

「今から十一年前に、このアジサイ夢ロードづくりが始まったんだよ。町のシンボルをつくって、地域みんなが集まる場所にしたっていうわたち小学生の夢を地域の人たちが理解してくれて、いっしょに始めたんだ。」

「えーっ。小学生が言い始めたんですか？」

「そう。草だらけの川の土手に、アジサイを植えて、みんなが集まる夢ロードをつくらうっていう大きな夢なんだけど。それを地域の人たちは、応援してくれて、みんなで力を合わせてつくってきたのよ。毎年少しずつアジサイを植えて、この夢ロードができてきたってわけ。」

「すごいなあ。順調に夢が実現してきたんですね。」

「ううん、そんなことないよ。まず、土手の両側にアジサイを植える『たな』を作るんだけど、





これが大変だったわ。それに、アジサイをさし木でどんどん増やして、苗木を育てなきゃいけないし。植えたら、水やりをして、肥料をやって、草ぬきもしなくちゃいけない。枯れたら植樹し直すの。アジサイの株からはなれているところは、地域の人が草刈り機で草を刈るの。毎月最終日曜日が『アジサイの世話の日』になったんだけど、地域の人がたくさんアジサイ・ボランテニアになってくれて、何年もかかって、やっとできてきたんだよ。」

たけしは、お姉さんの話を聞いているうちに、小学生だけでなく地域の人も分かってい

そこへ、草刈り機を持ったおじいさんが通りかかった。お姉さんが、

「あーっ。松木さん、お久しぶりです。」

と急に大きな声をあげた。おじいさんも、

「おお。がんばつとるなあ。すごい草の山ができとるやないか。わしも、

若いもんには、まだまだ負けられんけんなあ。草刈りがんばるでえ。あ

っはっはっ。」

そう言つて、むこうの土手の草刈りに行ってしまった。

「松木さん、十一年前と同じせりふやわ。今でもすごく元気やねえ。」

お姉さんがそうつぶやいた。

「松木さんと知り合いなんですか？」

「うん。だって、松木さんは、夢ロードづくりを始めたときから、ボランテニアをしてってくれる人なんだよ。アジサイの世話の日以外も夢ロードに出てきて、草を刈ってくれるの。あれからずっ



と、ボランティアを続けてるんだね。あのころ、たしか七十歳前って言ってたから、今は八十歳になったのかなあ？」

たけしは、アジサイ夢ロードを見回した。きれいにアジサイが咲いている所もあれば、草に囲まれてアジサイが見えなくなってしまう所、もうすっかり枯れてしまったりアジサイがなくなっている所もある。たけしは、何ともいえない気持ちになってきた。

たけしは、立ち上がって、班のみんなに叫んだ。

「みんな、あと十分。小学生の力は大きいけん、大人やお年寄りの方に負けずにがんばろう。みんな夢ロードをつくらう！」

「オッケー。」

「あと十分がんばろう！」
小学生も大人も、みんな汗いっぱいだ。でも、その顔はみんなにこにこしている。草をぬくたけしの手も速まってきた。（後で、夢ロードができたわけを、あきら君に話そう。そして、今度のアジサイの世話にいっしょに参加しようとかそってみよう。）

たけしは、この後のアジサイ祭りで歌う歌を自然と口ずさんでいた。

♪ 大きな 大きな夢のせて 未来にのびるよ 夢ロード ♪

